

奇妙な風習

言語学者ヤンソンさんは、日本の病院で診察を受けたことがあるそのときー。

カルテを知る権利

「お医者さんがカルテをドイツ語で書くのです。日本なのに……。私がドイツ語を読めると知って、かれは日本語で書き始めました。でも、日本語も読めると知ったときの、かれの困った顔といったら……。このとき、患者が読めないように外国語で書く、という奇妙な風習が、日本にはあるのだと知りました。カルテというのは『患者のため』にではなく、『医師のため』にあるのでしょうか。」

スウェーデンでは、カルテはラテン語が多少まじることはあっても、スウェーデン語で書かれる。この国には「自分に関するデータはすべて知る権利がある」という原則があり、カルテも例外ではない。一がんや精神病は、場合によって、知らせぬこともあるが。

ヤンソンさんはもう一つ驚いた。

「診察台と待合室はつながっていて、話の内容は順番を待っている20人くらいの患者に聞えてしまうんです。こういう個人の秘密には、気をつかわないのですね。」

即座に全データ

スウェーデンの医療は、世界でもっとも情報化が進んでいる。

こどもが生れると、10ケタの登録番号がつけられ、一生ついて回る。この番号を使って、たとえばストックホルム郡では、150万人の住民の健康に関するデータがコンピューターに蓄えられている。

患者から見つかった細菌の種類やその性質もコンピューターに入れられる。国立細菌研究所は、それを集計し分析して、国全体の細菌感染の動きをキャッチ、手ばやく対策をたてる。

「いま、アンデルス・アンダソン氏（見学者用の架空の人物）が交通事故にあってかつぎこまれてきたとしましょう」一ストックホルム市郊外にあるフディングゲ病院のルンドブラード女史は、タイプとテレビのあいの子みみたいな機械のキーをたたいた。

ブラウン管に情報が現れた。血液型、アレルギーや持病の有無、緊急のときの連絡先……。

「これを参考にして、すぐ手術を始められるわけです。意識を失った患者のからだのことは、ふつう、なにもわかりません。が、このコンピューターを利用す

れば、手術の前に知っておかねばならないことが、いろいろわかり、手術の安全性が高まります。」

同じようにして、過去の入院歴、通院歴、これまでにX線検査で受けた放射線の量、家族構成なども、たちどころに写しだすことができる。

この情報化には、スウェーデンでも反対がある。「すべての秘密をまるごと他人ににぎられては物騒だ。」

もちろん、技術的な歯止めは一応されている。たとえば、情報を引出すためには、医師や医療従事者たち個人個人に割当てられた暗号をコンピューターに送りこまねばならない。暗号は、他人に盗まれないよう、しばしば変える。だが、何のデータを引出したかがコンピューターに記憶される……。

秘密は守れるか

エレブロの郡事務所には、全国民の基本データを入れた 18 本の磁気テープがあった。それを見ながら考えた。一かりに、功罪の「功」を重視してこの方式を導入したとして、日本の為政者や医師が、それを「患者のため」に使う保証があるだろうか。個人の秘密をほんとうに守るだろうか。一患者にカルテを見せる義務はない、と医師の多くが信じ、また、待合室の人たちに話がつつ抜けになることに、少しも気を遣わない日本で……。

日本の国民総背番号制

行政管理庁は 1970 年 3 月、各省庁連絡会議を開き、コンピューターを効果的に使うため、国民 1 人 1 人に番号をふる制度の検討を始めた。72 年度から発足の予定だったが「手軽に特定個人の犯罪歴、所得などのデータを引出せるようになると、プライバシーを侵害される危険がある」などの批判が強いうえ、各省庁のコンピューター機種が違うため技術的に問題があることがわかり、1 年延期された。